



恩納村博物館が建設される前は、現在の位置の向かい側にありました

者とその周辺」（『広報おんな』2023年1月号）をご参照ください。この抽出作業を通して「松姓家譜」という資料のなかで、新たな事実を「発見」しました。1824（道光4）年に恩納間切に漂着した唐人は海上に長く漂ったため、飢えと渇きによって命の危険にさらされたが、泊村に移送されると、昼夜にわたって仲地紀仁の治療を受けたとこのことが記録されています。この歴史的事実を、近世琉球における異国の漂着者への対応などの一事例として捉えることができます。

このように、史資料を収集し、唐人墓の墓碑や文書資料の「批判」をして、史資料を組み合わせながら、歴史的事実を確定して歴史像を構築することが重要です。ここでいう「批判」とは、精査や検証、分析とというような意味です。また、確定した過去の事実には歴史的な意義を見出して独自の歴史像を構築するか、あるいは歴史的事実を歴史的な変遷のなかに位置づけたりすることが歴史を叙述する方法です。このような地道な作業を繰り返していくことが、恩納村史「歴史編」専門部会と事務局の主な仕事です。こうした叙述を通して、読者の方々は、恩納村の歴史に触れることになり、それに興味・関心をもつこともあろうかと思えます。また、過去の事実の集積によって現在の恩納村の社会・民俗



は形成されています。現在の恩納村の人々が、恩納村の未来を思い描きながら、現在を生き、やがてその営みが過去の事実として蓄積されて未来の恩納村が形成されることになるのです。歴史を学ぶということは、現在を知り、未来を作るためのヒントとなるのです。

【参考文献】

- ・『恩納村誌』仲松弥秀 1980年
- ・『金石文』1985年
- ・『なきじん研究』第9号 1999年
- ・『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅰ 国頭・中頭方西海道（Ⅱ）』1986年
- ・『琉球史料叢書 第4巻 中山世譜』1962年
- ・『歴代宝案 訳注本第10冊』2020年